

立教大学コミュニティ福祉研究所学術研究推進資金
大学院生研究 2023年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 コミュニティ福祉学研究科 コミュニティ福祉学専攻	
指導教員	所属・職名	氏名
	コミュニティ福祉学研究科・教授	鈴木弥生
研究課題名	日本在住のインド出身者における伝統的慣習への意識	
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏名
	コミュニティ福祉学研究科・コミュニティ福祉学専攻・博士前期課程 1 年	宮原凜
研究期間	2023年度	
研究経費	100千円	

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、「インドにおける伝統的慣習やジェンダーの現状に対する人々の意識を明らかにすること」を目的としている。調査方法は、先行研究の分析、インド出身者が参加するイベントの参与観察、インド出身者を対象としたインタビュー調査である。まず、先行研究の分析を通して、古代インドから現在に至るまで、ヒンドゥーの捉えられ方が社会の中でどのように移り変わってきたのかを考察している。また、イベントの参与観察、東京江戸川区在住と神奈川県横浜市在住のインド出身者を対象としたインタビュー調査を実施し、現代の人々の中のヒンドゥーの意義やジェンダーの現状に対する意識を明らかにしている。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

{ インド } { ジェンダー } { 慣習 }

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

1. 研究の背景

インド国内では、ダウリー（結婚持参金）といった伝統的慣習が未だに存在し、女性に対する暴力も多く発生している。こうした状況に対して、Self Employed Women's Association (以下 SEWA) は、その会員の多くが低層カーストの女性であるにもかかわらず、女性の経済的、社会的自立を促し、慣習に関する問題の解決に寄与している。そして、その活動は一定の成果を出している (喜多村 2004)。そこで 2024 年度以降の修士論文では、慣習を打開する媒体として SEWA を捉え、その活動意義を明らかにしていく。そのためにはまず慣習に大きく関わるヒンドゥーやジェンダーの認識を明らかにする必要があると考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、伝統的慣習やジェンダーの現状に対する日本在住のインド出身者の認識を明らかにすることである。SEWAの活動意義を明らかにするため、本研究を2024年度以降の研究の予備的調査として位置付け、慣習に大きく関係するといわれているヒンドゥーとジェンダーに焦点を当てる。

3. 先行研究の分析；“ヒンドゥー”の捉えられ方の変化

インド国内において、初期のヒンドゥーはペルシアからインドに侵入してきたアーリヤ人の宗教が融合してできたものである。古代インドでは「不可触民」という階層は存在せず、その代わりに「シュードラ」差別が存在していた。実際、『マヌ法典』には、「最下層の人間（シュードラ）が四股のどれかで優れた人間（ブラーフマナ）に危害を加えるとき、彼のその箇所は切断されるべし。これがマヌの教訓である」（渡瀬 2013：287）と書かれているように、シュードラに対して厳しい処罰が存在していた。このような古代ヒンドゥーに変化をもたらした要因の1つは外からの侵攻だと考えられる。特に、イギリスの植民地支配は政治的に人々の中に境界を作り、未だに人々を分断し続けている（竹中 2011）。また現代のインドにおいて、菅沼（2007）は経済自由化やグローバル化、消費文化という新たな価値観の登場による経済的不安や、ソビエト連邦崩壊に伴う社会主義政権の崩壊等の政治的不安を受け止めたヒンドゥー・ナショナリズムは人々の票を獲得して勢力を拡大させたと述べている。このように、現代のヒンドゥーは政治的、経済的影響を強く受け、古代インドのヒンドゥーとは変化を遂げていることが明らかである。これらの点を踏まえて、以下の調査を行った。

4. 調査内容

調査内容は、東京都江戸川区「江戸川印度文化センター」と神奈川県横浜市緑区を拠点とする「霧が丘ぷらっとほーむ」の活動に参加をしているインド出身者へのインタビュー調査と、「霧が丘ぷらっとほーむ」が参加するイベントの参与観察である。なお、インタビュー調査はそれぞれコミュニティ福祉学部倫理指針に係る研究・実験計画審査の承認（承認番号：KOMI23005N）（承認番号：KOMI23004N）を経て実施しており、人権の保護に関する法令等を確認して遵守し、調査対象者のプライバシーに最大限の倫理的配慮を払い、本人が特定できてしまう固有名詞の使用は避け、調査に対する「断る権利」にも十分な配慮を行った。具体的には、質問紙や調査結果において、実名を記載することはなく、全てイニシャルのみの記載としている。また、その旨は調査の同意書にも記載し、了承を得た場合のみ調査を行った。そして、インタビュー調査の途中であっても、解答を拒否して頂いて構わないということも伝えた。また、質問項目についても、コミュニティ福祉学部倫理指針に係る研究・実験計画審査の承認を得ている。調査実施日程、人数、そして質問項目は以下の通りである。

〈霧が丘ぷらっとほーむ（横浜）の調査実施日程〉

参与観察：2023年10月1日「多文化フェア@なかやま」、10月28日「デイワリ」、12月3日「あーすフェスタかながわ2023」

インタビュー調査：2024年1月29日～31日、2月18日

〈江戸川印度文化センター（江戸川区）の調査実施日程〉

インタビュー調査：2024年1月8日、2月3日、2月5日

〈実施人数〉

回答を得られた調査対象者は東京都江戸川区4名（女性1名、男性3名）、神奈川県横浜市9名（女性9名、男性0名）の計13名である。

〈質問項目〉

1. 性別
 2. 年齢 20代、30代、40代、50代、60代、その他
 3. 名前（イニシャル）
 4. ヒンドゥー教をどんな宗教と考えているか
 5. 他宗教への考え方
 6. カースト（職業区別として）について
- ① インド国内でカーストを意識した経験はありますか。もしあれば、差支えない範囲でどのような時か教えていただくとありがたいです。
- ② インドではカーストが職種に影響を与えているとお考えですか。

研究成果の概要 つづき

③ 現在、インドではカーストよりも家族の影響が強いと伺いますが、そのような状況があるとお考えでしょうか。

④ インドに残る慣習はカーストによるものだとお考えでしょうか。差支えない範囲で 教えていただけるとありがたいです。

7. インドの女性が今どのような状況にいるのか ①教育 ②文化 ③意思決定

5. 調査結果とその分析

特に重要と思われる結果として、以下の2点を取り上げることとする。なお、紙面の都合上、内容を要約している。

(1) ヒンドゥーと他の宗教についての捉え方

回答が得られた12名全員はヒンドゥーについての捉え方として、「ヒンドゥーは宗教ではない」と回答していた。また、「How people live」や「How to live」というように「人々の生き方」と表現することもあった。つまり、彼女・彼らはヒンドゥーを1つの宗教として信仰しているのではなく、自身の生き方として捉えているのである。

それに加えて、「他宗教への考え方」に関する質問に対して、「私はこの神を信じるけれど、あなたはこれを信じるのね」や「イスラム教を信仰している友達もいる」というように、他の宗教に対して寛容的な回答があった。この結果から、多神教であるヒンドゥーを信仰する人々は、他の神を信仰する他宗教を受け入れていることが分かった。

(2) ジェンダーに関する意識

「現在のインドにおける女性の状況」というジェンダーに関する質問に対して、8割の回答者は「much better (より良い)」と表現していた。具体的には、「20年前と比べて女性の地位は高くなった」、「母親は自分が教育を受けられなかった分、子どもには高い教育を受けさせる」という回答が見られた。

また、「女性たちは現在自身で意志決定を行うことができているのか」という質問に対して、肯定的な回答が半数以上を占めた。具体的には、「夫は私の主張をいつも聞いてくれる、強要されたことは1度もない」や「私の家族は私が何をすると許しても許してくれる」と回答している。このことから、自身の意見を日常的に主張していることが解釈できる。これに対して、「Depends on families (家族による)」という表現も見られた。例えば、「義理のお母さんが何とどういうかによって決定が変わる」、「別に強いているわけではないけれど、妻は何かをするときにいつも私に聞く」と回答している。ここから、強いられているわけではないものの、意思決定を自分以外の他者にゆだねている状況があることが理解できる。このように、家族の中での意志決定に関しては人によって、また家族によって異なることが分かった。

それに加えて、「カーストよりも家族の影響の方が強いと感じるか」という質問に対し、9割以上が肯定的な回答をしていた。このことから、調査対象者にとって、カーストよりも世代を超えて受け継がれてきた慣習やしきたりが彼女・彼らの生活に大きな影響を与えていると考えられる。

6. 本研究の限界

本研究の限界は調査対象者の限定性である。本来であれば、インドに在住する人々を対象に調査をすべきだが、本申請の期間を考慮し、日本に在住するインド出身者を対象に調査を行った。そのため、高層・中間層カーストのインド出身者が多く、比較的裕福なインド出身者であり、カーストによって生じる違いが存在する可能性がある。2024年度以降は現地に直接赴き、インドでの研究・調査を通して現状をより明らかにしていきたい。

7. 考察

限られた調査の範囲内ではあるが、ヒンドゥーとは調査対象者にとって「人の生き方」であり、他宗教に対して寛容的であることが分かった。また、ジェンダーに関する問題についての捉え方は様々であった。その要因には慣習やしきたりの影響が存在しており、一概に宗教の影響ではない可能性がある。

引用文献

喜多村百合 (2004) 『インドの発展とジェンダー：女性NGOによる開発のパラダイム転換』新曜社。

菅沼愛 (2007) 「インド・グジャラート州における女性の平和構築」西川潤・八木尚志・清水和巳編『社会科学を再構築する地域平和と内発的発展』, 第16章所収, 336-361頁。

竹中千春 (2011) 「南アジアにおけるジェンダーと政治——インド民主主義のジェンダー・ダイナミクス——」『日本比較政治学会年報』13巻、195-228頁

https://www.jstage.jst.go.jp/article/hikakuseiji/13/0/13_195/_pdf/-char/ja (2024年4月5日最終アクセス)。

渡瀬信之訳注 (2013) 『マヌ法典』平凡社。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

- ① 宮原凜 (2023) 「Self Employed Women' s Association(SEWA)から見る“抑圧”からの脱却」『まなびあい』第16巻、立教大学コミュニティ福祉学会・立教大学コミュニティ福祉学部、141-150頁。
- ② 宮原凜 (2024) 「インドにおける慣習を超えた社会の創造—SEWAにおける格差是正—」『コミュニティ福祉研究所 NEWS』Vol.4、6頁、立教大学コミュニティ福祉研究所
<https://chs.rikkyo.ac.jp/institute/q5av2j0000000117-att/vol14.pdf> (2024年5月28日最終アクセス)。